秋の彼岸によせて

平成二十三年九月　大乗寺　住職　岡　光俊

彼岸とは彼(か)の岸、悟りの岸とも申します。

私たちの住んでいる迷いの此(こ)の岸から、悟りの彼(か)の岸へ向かうための精進努力する月を彼岸月(ひがんづき)と申します。

お釈迦さまは私たちにどのような努力をし、どのようにこの月を過ごしなさいと申されているのでしょう。

お釈迦さまの教えは、皆さまの日常の生活のなかにあると申されています。今までの日常生活を続けながら、悟りの岸に誰もが進めると申されています。いったいどういうことなのでしょう。

ではここで、皆さまが毎日体験されている出会いについて考えてみましょう。

出会いを当たり前、偶然とみれば、なにも生まれません。皆さまが出会っておられる、家族、知人、仕事仲間、このかたたちとの出会いは、どなたがご用意して下さっているのでしょう。ご自身から働きかけて出会わせて頂いたかたは、何人おられますか？

職場へいかせて頂いて出会えたかた、紹介して頂いて出会えたかた、産まれて下さって出会えたかた。命を頂いて出会いが始まります。

自分という命の原点が地球誕生、宇宙誕生まで遡り、果てしない命の引き継ぎの何億回という繰り返しの果てに、自分に届く。どのような命も引き継ぎでしか頂けません。突然どこからか現れる命はどこにもありません。

お一人お一人の今生きている命、すべての生命はこのように無限の時間の存在です。

毎日の生活の視点を変えるだけで、現実が、真実が見え、自分は今なにをしなければならないかが自然に、当たり前に解ってきます。

お釈迦さまはこのことを常に忘れず、自分の今の生活がすべて意味あるものであり、それを知ることで人生は活き活きと生き始めると申されています。

人生、最後まで意味深く、崇高な時間とさせて頂かなければならないと思います。ご自身の命一つに向き合うだけでも、日常忘れてしまっている命の尊さが見えてきます。自分との出会いは、自分という人間を見つめ始めるときになるのでしょうか。しかし、この自分という存在も、自分で意識し自分で決めて、今があるわけでもないように思えます。

身の回りで起きていること、すべて当たり前ではなく、あること難しの存在であることに気づけば、そこから感謝の泉が湧き始めます。

自分の存在の尊さに深く気づかせて頂けた人は、ほかの方々の存在も同じく、深く尊い存在であることに気づかせて頂けるものです。そして、生きとし生けるものの尊さに気づけた人は、周りの方々を大切にし、物を大切にし、尊ぶ心を宿して頂けるものです。

このように人の心は、ものの見方一つで感謝一杯の心にも、不満に満ち溢れた心にもなってしまうものです。

不満を周りのせいにするかたがおられますが、お釈迦さまは、不満に満ち溢れた心は、相手が悪いのではなく、自分自身の無知からくることを知りなさいと申されています。

毎日の生活の見方、感じかたを知らなかったから、今日までの人生を無駄にしてきただけです。今日から見方を変えるだけで、誰でも明るい人生にと変えることができます。

そして、自分の無知に気づいたなら、ご先祖さまに向かい深く頭(こうべ)を垂(た)れ、毎日お経を頂くだけで、佛智(ぶっち)を頂き、自分を見つけ、感謝一杯の心で過ごせる生きかたに向かわせて頂けるものです。

彼岸への出発です。

秋の彼岸月(ひがんづき)

今日から実行してみましょう。実行しないで得られる、心の安穏(あんのん)はあり得ません。何故(なぜ)なら、人は体験するための肉体を持ってしまっているからです。

合掌